第 16 号
発行
釧路湖陵同窓会
発行日
昭和62年 8月9日
印刷所
藤田印刷KK

くまざさ

同窓の絆を強く

釧路湖陵同窓会副会長
豊島弘道

「湖陵に長し七十年……」応援歌の一節に母校の歴史が刻まれている。私たちは、この部分を三十年……と歌った。今や湖陵高校の時代となって、今春の卒業生が三十九期ということである。

数年前より同窓会報の「くまざさ」の編集に携わるようになって同窓生の先輩・後輩に原稿依頼をしたり、打合せを持つ機会があって、同窓会についての認識も深まり、意識も強まって、いろいろと勉強させてもらっている。

「湖陵同窓会」というと、釧中卒業の先輩から、釧中時代の同窓生が入らない名称ではないかとお叱りを受けたことがある。これは湖陵ケ丘の学舎で生活した釧中卒業生と湖陵高校卒業生をまとめて湖陵同窓生としているのであって母校の歴史の中で、先輩・後輩の関係で確実に同窓生なのである。湖陵高校の卒業生は、湖陵何期として「高」を略している場合が普通で、誤解も生ずるのだと思う。

釧中は、最後の入学生が三十五期生であり、学制の改革で卒業時には湖陵高四期生ということになっている。そして来年には四十期生の卒業ということになるのだから正に七十年余の時間と空間をもつ大同窓会なのである。

年に一度の同窓会の総会と懇親会には、それぞれの当番期の企画よろしきを得て、年々盛り上がりをみせており、各地からなつかしい先輩・後輩も顔を見せてくれて大変有意義な交流の場が繰り広げられるようになった。また、若手の当番期が、総会の運営に参画してから同期会が改めて組織され、結束を強めるようになることもあって、全体の組織を強化拡大する上で大変よろこばしいことである。

同窓の仲間が集う同期会や総会は、他の会合とは違って、集合することが目的になるのだと思う。学生時代、同じ学び舎で生活を共にし、青春を謳歌した共通の経験を持って、それをなつかしみ、想い出し、たしかめ合って感慨にひたること以外に集う理由はないのだと思う。異国にあって母国を想う心であり、故郷を離れて生活して望郷の念にかられる心情と同じものなのではないかと思う。

最近は、物質中心の時代であり変化のはげしい不確かな世の中である。価値の判断も物や金の量で決めてしまう傾向にある。人間の価値判断をうっかりすると、この物と金の量的なものさしで推し測るようになりかねない。物質的に恵まれてきた反面、精神的に貧しくなって、いろいろなトラブルも増えてきている。こういう時代こそ、精神的な豊かさを求めて、人々が活動しなければならないと思うのである。同窓会の活動も、集いも、この人間復古への働きを持っていると確信する。特別な理由はないけれど、同窓の先輩・後輩そして同期が一堂に集まって青春にもどる機会こそ、人間的な豊かさを保ち拡げそして深める大事なひとときになると思うのである。

母校の改築が決まり、更に新たな発展を遂げようとする時期、湖陵同窓会もまた今後一層の発展充実するよう念じて止まない。

同窓会名簿を予約制出版で

同窓会の命は、会員の消息をどの程度正確につかんでいるかで決まると言われる。

今ある名簿は、昭和五十二年、中村隆大先輩が同窓会長の時代に当時、浪岡校長の指導で、北陽高校の先生方の努力で作成されたものである。

あれから十年が経過して、同窓生の動向もよく把握できない状態になってきた。名簿作成について事務局、役員会で検討した結果、名簿出版会社に依頼して、昭和六十三年中旬には同窓会名簿を刊行するように段取りをした。

B五判・約六百ページで写真集や総索引の付した豪華な体裁である。歴史のある学校では、同窓会名簿は大抵このような専門業者に依頼し、予約制限定出版の形をとっている。また、名簿の中に広告ページを用意し、広告予約者も募っているので、できる限りご協力いただいて、立派な同窓会名簿の完成をみたいのでよろしくご協力をお願いしたい。

（事務局）

学園だより

同窓生の皆さま、いかがお過しですか。相変らず新鮮味のない拙文で、再々「学園からの報告」を記すのは些か気が重いのですが、編集子の命令とあっては致し方なく気をとり直して報告する次第です。

紙面の関係で、関心を持って載せそうな点について以下列挙してみます。

＜三月＞・第39回卒業式（卒業生四三六名、卒業生総数一八、三四九名）・離任式（転出一一名、退職二名＝赤坂忠亮・横山武司の各先生）

＜四月＞・入学式（入学者四四五名、在校生総数一、二九〇名、三〇学級）・下宿、列車通学調査（下宿生一一五名、列車通学生九三名）・クラブ登録（運動部一六部・四七五名、文化部二〇部・三五一名、外局四・六六名）・校歌・応援歌の練習

＜五月＞・教育実習（一八名、いずれも卒業生）・高野連春季地区大会（優勝）・宿泊研修（一年生、弟子屈イナセランドにて）

＜六月＞・高野連春季全道大会（一回戦対東海大四、敗退）・高体連地区大会（一四部・二九四名）・同全道大会（九部・八九名）・高野連地区大会（優勝、一九名）・高文連放送コンテスト（五部門・二五名）・合唱コンクール（地区優勝・四〇名）・全道高校囲碁選手権（個人優勝）

＜七月＞・高野連北北海道大会（砂川市・三年連続一八回目）・全国高校放送コンテスト（熊沢裕美子・二年・朗読部門・東京）・全国高校囲碁選手権（桧沢仁宏・二年・二年連続・日本碁院）・夏期講座（三年・延四五〇名）、校内補修（一・二・三年・延一、〇一三名）・全国高校総体（北海道）

≪陸上≫平川敦子・三年・八〇〇M・三年連続・全道高校記録保持者・第四回アジアインターシティJ東京大会及び八七北海道ソ連極東地区親善スポーツ大会出場、≪羽根珠≫女子・木村ゆかり、斎藤寛子三年、女子S・木村三年、≪ハンドボール≫一九名・三回目、・湖陵祭（第三七回、八月二八日～三一日）。

全国囲碁選手権2年連続出場の桧沢君

陸上で好成績をあげた平川さん

この原稿を認めている頃、応援団（二二名）は、新PTA会長の妹尾継男氏（湖陵四期）より贈られた大太鼓二個（一尺八寸、一四〇万円）と後援会有志の方々から寄贈された応援旗五枚（各一〇〇cm×三六〇cm）を携え、炎天下の砂川で野球部応援に懸命。それに応えて、一昨年に続いて決勝進出帯広北と延長十四回を闘ったが、力尽きた。ピッチャー佐藤の62イニングス無失点の大記録で、湖陵の名は全国に知れわたった。

すでに「湖陵文庫」創設（六二年一月）はご存知の通りと思いますが（寄せられた著作六〇点、三六名）、校舎改築（七月二五日決定）を期に併せて美術作品収集の具体化も進められています。是非多くの情報をご提供下さい。

今春の卒業生の動向は別表の通りで、進路担当のまとめによると①国公立大入試は最高三校まで受験可能になったが、複数校合格は容易ではない（二校合格者一六名三校一名）、②私立大―合格者六九名中、指定校推薦二八名、一般推薦一一名（五七％）、私大受験者昨年比七七名減、首都圏大学合格は相変らず困難、③短大・専修―女子志願者相変らず多数、看護系指向強い、④就職―不況と短大卒進出で増々困難、と分析しています。いずれにしても制度の変化に左右されずに着実に力量を身につけることが肝要。

以上概略述べましたが、母校の様子の一端を知って戴けたものと思います。今後とも母校のためにご支援の程お願い申し上げながら報告といたします。

（文責　湖陵四期　和田信幸）

湖陵高63年改築本決まり

湖陵高校は、昭和二十八年二月に焼失し、翌年現校舎が落成して三十余年、老朽化が進み、なんとか校舎改築をという期成会を結成しての改築運動が実って宿願の決定にこぎつけた。

道の補正予算案に設計調査四校分の中に湖陵高が含まれ、いよいよ六十三年度から着工する運びとなった訳である。

緑ケ岡のゴルフ場というすばらしい緑の環境の中に建設用地を持ったこともあって、実現できたのだが、誠にタイミングがよく展望が文字どおり開かれたことになる。

校舎建設に続いて、わが同窓会として、めざしてきた同窓会館建設にむけてその実現が望まれる。

昭和62年3月卒業生進学状況

性別	卒業表	就職希望者	進学希望者	合格者 大学 国立	公立	私立	計	準大学	短大	各種専修	就職	合計	不合（含不明者）
男	262	19	243	52	2	47	101	1	0	18	17	137	124
女	174	22	152	25	0	22	47	0	46	31	19	143	31
計	436	41	395	77	2	69	148	1	46	49	36	280	155
%		9.4	90.6	19.5	0.05	17.5	37.6	0.3	11.7	12.4	87.8	64.4	35.6

わが青春は…

「戦争」最中の釧中時代

釧中二十五期　山田　達雄

「わが青春は…」と改めて考えて見ると、果たして自分に青春時代等あったろうかという思いが先に立つ。それというのも、昭和十二年四月釧中に入学して三ケ月後日中戦争が始まり、昭和十六年十二月、太平洋戦争に突入と、釧中在学五年間は「戦争」の二文字が頭から離れることが無かったからかも知れない。

寮生活をしていた私にとって、一・二年の頃は先生よりも上級生の方が恐ろしい存在であった事、上級生の身の回りの世話一切をさせられた事、一週間に一度、金曜日の夜の説教時の何とも云えぬ恐怖感、今も忘れない。反面、寮生全員での一泊旅行、寮祭等楽しい想い出も数多くあった。三年の秋に、自宅からの通学に変った為、四年生以降の殿様気取りの生活は体験することなく終った。

中学生活最後の二年間は、三角形に折り込んだ手拭いを上衣からのぞかせたり、黒マントに足駄がけ、帽子も改造して格好良さを自負したものである。部活では、テニス、ブラスバンド、アイスホッケーと三部をかけもち、何れも中途半端、遠征しても一回戦止まりブラスバンド等は、小学生（当時旭小にバンドがあった）にも劣るみじめさ、然し、NHKからの依頼で有志を集め、即席のハーモニカバンドで、ローカル放送に出演出来たという事が自慢の種であった。

昭和十七年、卒業と同時に代用教員となり、子どもの魅力に取りつかれ現役入隊まで若僧先生として勤める事になるが、この経験が私の将来を決定づける切っ掛けとなった事は確かであり、軍隊生活中も「生きて帰れたら必ず教師の道を」の思いを強くした。

終戦後、二十代で師範に入学、六年ぶりの学生生活、中学時代とは違った意味で楽しい三年間であった。今にして思えば、戦中の「ほしがりません勝つ迄は」の毎日と、戦後、「耐乏生活でのアルバイト学生時代」にそれなりの青春があったように思われる。

新聞づくりに青春を懸ける

湖陵高九期　杉山　範雄

〝光陰矢の如し〟今そんな言葉を実感としてしみじみ味わっています。私達九期生は昭和三十二年に卒業し今年で満三十年が経過しました。私は云わゆる郡部（尺別炭砿中）からの入学組で憧れの湖陵の帽子をかぶったあの喜び、あの感激は今でも強烈に胸に残っています。

湖陵高校三年間の想い出は沢山ありますが、なかでも生徒会活動として二年間新聞局に入り「湖陵タイムス」づくりに情熱を燃やしたあの頃が何よりも懐しい想い出であります。入局の動機は確かクラス選出の形で〝イヤイヤながら〟であったと記憶しています。最初は面白くもなんともなかったのですが、ある時自分で書いた小さな囲み記事が紙面に載ってから興味と自信が湧き、遂に卒業まで書き続けました。しかし、いつも紙面づくりに頭を悩ましてばかりいました。それでも一端の記者気取りで文化祭の仮装行列が市内を練り歩く間、見物の市民に感想を求めたり、女性徒ばかりの茶華道部の展示会場へ胸をわくわくさせながら出向いて取材したり、或は沖口教頭先生に学校側の考え方をインタビューしたりしたものです。又その原稿整理の為、裸電球の薄暗い部室に居残ったり、印刷工場へ出向きまだインクの匂も新しいゲラ刷りを一字一句丹念に目を通しての校正を夜遅くまで赤鉛筆片手に行った事等想い出します。校正を終えたある秋の夜の帰路は月の光でことの外明るく急ぎ足下宿へ帰った印象は今でも鮮明です。こうした苦労の中で完成した新聞を全生徒へ配布した時の喜びと紙面批判に対する不安はいつも交錯しておりました。あれから一度も目にした事のない湖陵タイムスは今どのように変貌しただろうか。振り返えれば風の如く過ぎ去った感の我が青春。貴重な青春の一頁を新聞づくりに全力投球したあの熱き情は今も私の中で脈々としており、私の大きな誇りともなっております。

御婚礼・御宴会・御会合・御宿泊

政府登録国際観光ホテル・日本ホテル協会会員

釧路パシフィックホテル

れんが屋★AM11:00〜PM11:00

トロイカ★AM 8:00〜PM11:00

パシフィックイン・八まき・八宝園

中村　隆（釧中27期）

釧路市栄町2丁目6番地　☎24-8811

在札同窓会、組織拡大

＝熊笹会から札幌湖陵会へ＝

道都札幌に在住する釧中・湖陵高卒業生は、年々その数を増しているが、昨年から在札釧中卒業生で組織されていた熊笹会を発展させ、湖陵卒業生を含めた組織に拡大しようという機運が盛り上がり去る二月二十八日札幌市のエクスィングで、四〇〇人にのぼる参加者を得て札幌湖陵会の発足総会が開かれた。

当日は釧中十一期の田島大先輩から、湖陵二十期の北村和裕・高野義昭君まで、予想をはるかに上まわる釧中百三十五人湖陵二百五十七人計三百九十二人の同窓生、釧路からかけつけた長内同窓会長を始め、加藤・青木・安井の元校長などの来賓を迎えて、盛況な発足総会となり、組織の若返りを図ろうと意図された熊笹会の諸先輩の思いがようやく実現した。

北山幹事代行（釧中二十八期）の進行による発足総会は、懐かしい校歌の大合唱の後、西条会長（釧中二十六期）の挨拶・長内同窓会長の祝辞、経過報告、会則決定、新役員の選出などの議事を満場の拍手で終えて、在札釧中・湖陵卒業生の大団結がなった。

続いて座常任幹事（湖陵三期）の司会によって進められた懇親会は、クイズ勝ち抜き大会で最高潮に達し、親子ほどの年の差のある先輩後輩が、ホール中央を右往左往。湖陵三期から七期までの幹事を中心とした準備委員の周到な準備が見事に結実して、和気あいあいのうちに散会した。

札幌湖陵会への組織拡大は、六一年七月の熊笹会総会を契機に始まった。この時点で田島会長・清水幹事長（釧中二十期）の体制から、西条会長・石井幹事長（釧中三十一期）へと役員の若返りが行われ、当面湖陵十五期までを対象とする在札湖陵卒業生の把握と、組織化への取組が新幹事長を中心に精力的に展開された。十一月には湖陵各期の代表も参加して新組織に発展させる方向を確認、発足総会へ向けての呼び掛けや、各期名簿の作成などが平行して行われた。この間、幹事長が事故入院されるなどのアクシデントも起きたが、北山幹事長代行を核とする湖陵三期から七期までの準備運営委員の努力によって、会員名簿登録者千百三十六名に及ぶ大組織に生まれ変わったのだった。

六十二年度は、さらに若い期の湖陵卒業生の組織化を図りながら親睦と結束を高めようと企画している。

（釧中三十三期　曽川義雄記）

札幌湖陵会役員名簿

顧問
釧中8期　新津　正己
11期　田島与八郎
12期　堤　鋭一
15期　上関　敏夫
15期　青木　武夫
17期　米沢悟空翁

会長
釧中26期　西条　正人

副会長
25期　清水　悦男
26期　津田　悟
26期　渡辺　勘一
29期　田中　勝雄
32期　高橋　節郎
湖陵6期　高後実知子
7期　酒田　幸子
13期　栗林　正明

幹事長
釧中31期　石井　忠雅

常任幹事
釧中28期　北山　一男
32期　青木　馨
33期　曽川　義雄
湖陵3期　座　克己
4期　村山　幹夫
5期　山口　裕治
6期　山本　敏
7期　桧皮　義博

会計監査
釧中27期　井内　利道
29期　渡辺　勝次

御卒業・御入学の
晴れの日を
歴史の１ページに…

釧路市幣舞町２番２号
株式会社　吉井写真館
代表取締役　吉井祥朔（湖陵18期）
電話　41－4798番

釧中1期生
「中川久平先生」をたずねて

永田秀郎氏

今、釧路新聞に連載中の「中川久平」――郷土に生きる梅楓精神――の執筆者、湖陵高校の永田秀郎先生にお願いし寄稿していただいた。中川久平氏は釧中一期生の大先輩で、後輩の育成にあたり多大の影響力を与えた大人物であって、この連載は良い記念誌である……

七月はじめから釧路新聞へ書いております「中川久平――郷土に生きる梅楓精神――」について一文をということでございました。

私は釧路江南高校四期卒で、いわゆる湖陵人脈ではありませんが兄が釧中ということもあって、私もまた釧中生であったかの思いを追体験することがあります。

中川久平先生とは直接面識はありませんが、五十周年記念式典の祝辞を生々しく記憶しております（当時釧路工業高校から時間講師として来ておりましたものです）実に雄弁な魅力ある話し方をする人物だなという印象です。その後三十九年に湖陵高校へ転勤したのですが、国語科に太田常喜、塩田光世、高井博司の諸先輩、その他湖陵出身の多数の先生がおられまして中川久平先生のことはもちろん釧中―湖陵の伝統についていろいろ教わるところがありました。

今この仕事を通じて、湖陵高校の八十年にならんとする歴史が全国の各界で活躍して諸先輩によって織りなされ、それは釧路の発展の歴史と表裏一体をなしていることを知らされました。そしてその精神的バックボーンに中川久平先生の存在があると見ています。

特に戦後梅楓塾を興した業績は再評価する必要があります。最近の塾とはもちろんちがっていて、営利のためでなく、釧中の後輩に英語を教えてやろうと、寺小屋式ではじめたその無償の行為に敬服するのです。この梅楓塾で学んだ塾生が、今どのように活躍しているかをあとづけていくところに、この仕事を引きうけた一つの動機があるといえます。

梅楓塾については全体の半分くらいの分量になるだろうと思いますが、これから関係者にお会いしてその精神をさぐってまいりたいと思っています。特にこの塾で勉強した人たちの名簿が残っているわけでもないので、堀りおこしも大へんな仕事となりそうですが、明らかに教育の理想のかたちがそこにはあったと見ております。そして現在の釧路の各界で活躍なさっている方々がこの塾で学んでいたことをあとづけてみたいのです。

しかし梅楓塾が後半、中川久平先生の理想から次第にかけ離れていかざるをえなかったし、また晩年釧路第一高等学校校長をひきうけられて、建学の志中ばで瞑目なされた。

書き物としてご自分のお考えを残されることの殆どなかった先生であったから、さまざまな憶測もでてくるのですが心中の苦悩については外へ表わすことはすくなかったお人柄のようである。どれほど心残りがあったことか。それも垣間みたいものなのです。

人生に挫折しないで生きぬけるのはすばらしいが、挫折をのりこえて、功名を捨て郷土にその志を残こそうとした先生の意志や壮なるものがあります。

かつて奥田達也氏がお書きになった「釧中物語」はまことに生き生きとした青春譜であり、その域にとうてい達しえないのですが、中川久平という釧中の大先輩の生涯をたどる時、おのずと先行作品とは別な釧中―湖陵の伝統を見つめなおすことができたならば、望外のよろこびと思うのであります

ご声援のほど願いあげます。

真心伝えたい…御婚礼・御宴会・御会合・御宿泊

釧路シーサイドホテル

黒滝恵一（湖陵14期）

〒085 釧路市南大通り5丁目1－1

ご予約・お問い合せは（0154）41－1717

青春譜・湖陵ケ丘《16》

釧中32期　奥田達也

野球黄金期

釧中野球部は強かった。第一期黄金時代は磯部正己、荻野一郎、弥寝春二、浜野幸四郎ら七回生と西村浩二、福島兵之輔ら下級生を含め先輩菊池安三が直接指導した。

厳島神社の二代目宮司になる菊池が釧中教諭となったのは関東大震災の大正十二年。さらに熱心にしごいた。

釧路市民野球大会で釧中が優勝する。銀色優勝カップを初めて見た菊地正人野球部長は、嬉しさのあまり、部員一同を自宅に引率、ビールを買ってきて祝杯をあげた。

生徒にビールを飲ませたことがすぐバレて正人部長は翌朝、謹厳な阿部校長に呼び出される。

「教師たるものが、よりによって自分の学校の生徒にビールを飲ませるなんぞ、聞いたこともない…いかに野球大会で優勝したからとて、けしからんことだ」

「いや、どうも、申し訳のないことでございます。つい、うっかり喜んでしまって、大人の感覚でやってしまいました。弟達と喜ぶのに、ついビール、と思ってしまい済みませんでした。それにしても早いですね。どうして、おわかりになりましたか？」

「馬鹿いえ、ビールに酔っぱらった生徒が、電信柱につかまって、〝助けてくれ、助けてくれ〟とわめいていたのが、わからんのか」

「はーあ？」

正人部長、考えてみれば自分は大人で大丈夫でも、酒になれない酒に弱い生徒のこと、あれだけ飲んでは、試合のあとの疲れと、緊張のゆるみで、回りは早く、ノビルのは当たりまえ。

電柱で〝助けてくれ〟
教師の優勝酒に酔っぱらい

「いやはや可哀そうなことをした」と正人は、この愉快な連中に、おかしいやら、あわれやら。おこる気には毛頭なれない、でチョンなにしろ野球部は強い。だが、当時は、中学校同士の対抗試合は禁止されていた。道央、道南ではいつも応援がエキサイトし、喧嘩騒ぎが絶えなかったからである。

だが、そこは交渉して、大目に見てもらい、釧中野球部としてではなく、野球愛好者チーム同士として対抗試合をした。大正十二年の根室商業の来釧試合、釧路から遠征しての試合がそれである。

二晩、厳島神社へ集まった部員は、なれない手つきで、ユニホームの胸のマーク「SENCHU」の六文字をはずし「KORYO」の五文字をはりつけた。

根室遠征には、野球部のほかに剣道部、柔道部、陸上競技部が、一泊二日で出かけた。

校風刷新事件の大正八年入学した磯部ら七回生から二学級百名募集とふえたが、部員の数は少なくカケモチの選手がいる。当然、野球の試合は後回しになる。柔道の選手三人が、早く終えてこなければ野球対抗試合の「プレイ・ボール」はかからない。

勝ち抜きなら、早くに負けて駆けつけて欲しいくらいのもの。だが、柔道選手の弥寝ら三人は強く勝ってチームに戻ったときは、すでに九回を戦うのがむずかしい。

釧中野球部、硬式の初の根室遠征は、かくして七回戦ときめた。

根商も強い。釧中より七年先に開校しており、伝統は長い。

だが釧中はさらに強い。二点ずつ一回おきに加点、根商を一点ずつに押えて、七回終了時には七対三のスコアで大勝した。ようやく帰りの汽車の発車時刻にも間に合い、勝った選手の記念写真をとる時間もあり、スコア・ボードの下で勢揃いしてパチリ。

陸上競技も勝った。四部中三部が勝ち、選手らは意気ようようと汽車に乗る。だが、ただ一部、負けた剣道部員。伝統もある剣道部だけは遠征に敗けた屈辱に、悔し涙をぐっとこらえる。

これが植草義一、鈴木徳一ら九回生をして翌十三年、中川久平に指導をお願いし、釧中剣道部が練習を重ねる闘志の源泉になるのであった。

太陽のように明るく暖かい
真心で良い品をより安く
ご奉仕するセオチェーン

営業品目
●食料品●日用品●衣料品●軽食堂

セオ

妹尾商店　釧路市新橋大通1丁目　☎25－5345
新富士ストアー　釧路市新富士駅前　☎51－3467
愛国ストアー　釧路市愛国37番地　☎36－4295
白樺ストアー　釧路市白樺台1丁目　☎91－5423
昭園ストアー　釧路市昭和190番地　☎51－8853

妹尾　継男（湖陵4期）

当番期紹介

新人類としての五期

湖陵第五期
伊藤文雄

同窓会の当番幹事の役目は、今回で終わりだそうで、齢五十路を越えてみれば、精神的にいくら若いと思っても、現実に時間の経過を考えざるを得ない。

我々の年代は、なぜか戦中・戦後の学制改革の節目になっていて大変めまぐるしい学生時代を過ごしてきた。第一、小学校は国民学校一年生としての入学であったし中学校受験を前にして、当時、補習を担任の先生がしてくれて、いよいよあこがれの釧中受験と思ったら、新制中学校の生活が始まるといった具合であった。そして、ようやく昭和二十五年の四月に湖陵の門をくぐったのである。

一年先輩は、釧中三十五期という肩書きを持っているが、我が期にはそれがない。今流に言えば新人類であった。当時、二、三年の先輩からみれば、毛色の変わった存在であっただろう。もっとも、校舎は古めかしい釧中時代のまま校庭の南側には寄宿舎の建物が残っていたし、西側の土手にカラマツが連なって、学校全体の雰囲気は釧中の名残りがあって、うれしかった。破帽にマント、足駄がけのバンカラスタイルを好む者も結構いて、新旧渾然とした時代であった。

昭和二十七年三月の十勝沖大地震に驚き、翌二十八年二月の校舎焼失に泣いた波瀾の高校時代であったが、それだけに想い出も多いこの当番期をひとつの節目として同期の結束を更に強めたと思っている。

湖陵魂は永遠に

湖陵第十五期
門　喜久雄

旧制中学以来創立五十周年を迎えた湖陵高校に、大きな希望とほんの少しの不安が入り混じった気持で入学した我々も、早いもので卒業して二十五年、四半世紀も過ぎ去ってしまった。

昔を懐しみ、アルバムをゆっくり見開くと、授業の合間や昼食後の休み時間には急いで体育館に集まり、センターサークルを利用しての相撲に興じ、放課後は暗くなるまでソフトボールで遊んだ事などが昨日の出来事の如く思い出される。

折しも道議会で道教委が提案していた湖陵高校の大改築が六十三年に決定した。期成会を始めとする関係者の努力には最大の敬意を表します。昭和二十九年七月に完成して以来三十三年が経過した現校舎ですが、勉学に、スポーツに励み、そしてたくさんの思い出が染込んだ懐かしい校舎が消えてしまうことは本当に寂しい事です。改築により新しく生まれ変わる湖陵高校ではありますが、名実共に伝統ある湖陵魂は後世もしっかり受け継がれる様に希望します。

本年度の同窓会の中間幹事は同期会すら開いた事がない我が期ですので、どのように行動すべきか暗中模索でしたが、先輩諸氏にすっかり〝オンブ〟して準備も順調に進める事が出来ました。さすが我等の先輩と心より感謝感激している次第です。

同窓会一年生

湖陵第二十五期
木村俊宏

我々25期生が湖陵高校に入学した昭和45年と言うと、大阪・千里丘陵での日本万国博覧会の開催で70年代の幕開けをむかえ、我が国は経済大国の名をほしいままにしていた。その一方で、公害・環境汚染、地価の高騰など、高度経済成長のゆがみが生じて来た時期でもある。我々が卒業後間もなく襲った第一次オイル・ショックと狂乱物価によって、高度成長は終焉をむかえ、以後低成長へと大きく移行していく過渡期であった。

このような世相のうねりの中で学園闘争に遅れて来た我々は、ともすればアイデンティティをどこに求めてよいのか苦悩し、巷間、無気力・無関心・無感動のいわゆる三無主義なる言葉が頻繁にもてあそばれていた。我々も、新左翼の先輩と新人類の後輩との狭間にあって、曲がりかど的な存在なのだろうか。

卒業以来14年が経過しているのだが、25期の同期会は未だ結成されず、我々にとって同窓会総会に参列するのはまだまだこれからのことといった感じでいた。この度当番幹事を仰せ付かったが、5期15期の両先輩の心意気に圧倒されながら、何とか足を引っ張るまいと、会券売りに奔走しているのが実状である。まことに頼りない「同窓会一年生」ではあるが、同窓会のより一層の発展と総会当日の盛会を祈念してやまない。

想像から創造へのかけ橋
藤田印刷株式会社
〒085 釧路市若草町3番地1　☎22-4165・23-7411

社会人一年生

「教壇に立って」

釧路市立美原中学校
阿部俊幸（湖35期）

私は今春、北海道教育大学釧路分校を卒業し、美原中学校に赴任しました。赴任したころは、右も左もわからないといった状態でした。学級事務の仕事においても、印を押すことが多いのですが、それも上手にできず、いつもどの部分かがかけてしまうのです。教科指導においても、教材研究の段階で考えていたようにはいかないし生徒はいつも「ピンとこないな」というような顔つきをしていました。そんな中で私は一生懸命がんばる、それしかありませんでした。そして今、「だいぶ慣れてきたかな」という感じです。慣れてきたというだけでわからないことだらけなのは変わりません。

社会人と呼ばれるようになって四ケ月たったわけですが、学生時代との大きな違いは、「責任」ということだと思っています。私は今、学級担任として三十八名の生徒を担当しているわけですが、いくら未熟者の私であっても生徒にとっては先生ですし、生徒のためにもしっかりとやらねばならないのです。生徒に「先生は新米だから」と許してもらうわけにもいかないし、そんな言葉を聞きたくもありません。生徒に教育をほどこすという自覚と責任を持って、自分自身を精進させていくことが必要だと考えています。私の高校時代の友人たちも、今春社会人になった者、来春予定の者が大半なのですが、きっと職種は違っても、一年目に味わう気持ちは同じなのではないかと思います。それら友人にも負けぬよう、長い社会人としての人生を一歩一歩確実に前進していきたいと思います。

「前、ススメ！」

朝日生命釧路支社
諸我由美子（湖39期）

「よろしくお願いします！」

四月一日に社会人一年生としてぎこちないスタートを切ってからもうすぐ三ケ月になります。

実際、働いているとはいうものの、何も知らない最初の頃は緊張したまま、一日があっという間に過ぎてしまいました。仕事のステップの中のほんの些細なことでも戸惑いがあると先に進めず、時間だけがどんどん進んでいってしまうのです。

気がついたら今日に至っていたというと少し大げさかもしれませんが、そう感じるくらいあっという間でした。

この三ケ月、改めて考え直してみると「失敗」した分だけ前に進んだのではないだろうか、とそんな気がします。「失敗」。これには気をつけよう、と注意しているつもりでしたが、緊張が解けてくるにつれてポツリ、ポツリと出始めてしまいました。

だけどその後注意を受けることによって、自分の受け持っている仕事の意味を新たに教わりました先輩がまわりへの影響がないようフォローして下さるのを見て、ほかの仕事とのつながりを知りました。それまではただ、機械のように言われたとおり単純作業をしていたのです。前に、こんなことばを聞いたことがあります。

「失敗を恐れるな。そうやって少しずつ上手になっていくのだ」

このことばに甘えて失敗なんか平気だ、というわけではありませんが、このことばにはしばしば助けられました。

三ケ月たったとはいえまだほんの最初の部分に立っている私達ですが、失敗も前向きに考えてススんでいこう、と思います。

あとがき

▼甲子園をめざす高校野球の北大会、母校野球部の大健斗に拍手を送りたい。帯広北と息づまる決勝戦で延々十四回三時間四十一分の激闘の結果、残念ながら涙をのんだが、人々に大きな感動を与え、母校の名誉を高めてくれた。戦い続けた選手の根性に、湖陵健児の意気をみた。

▼母校の移転改築本決まりのニュースが入ってきた。母校建設期成会を中心に全市をあげての必死の運動のおかげで宿願がかない、六十三年度には新校舎が緑ケ岡のゴルフ場に建設される。最高の環境に近代的な校舎が建てられ、新たな湖陵の地となって母校の歴史を刻んでいくことになる。実現に期待して。

▼会報「くまざさ」は、シリーズものが多く、内容的に形式的な編になりがちである。同期会の動きや、同窓生の消息など、事務局にお寄せいただき、内容の充実を期したいと願っている。

投稿先　釧路市富士見一の七の一六
労働事務所センター内同窓会事務局
編集にたずさわった人
上岡信明・菅原孝夫・遠藤隆吉
和田信幸・豊島弘道・吉井　正